24

世界文学全集

背徳者／狭き門／田園交響楽／女の学校／ロベール

ジイド／石川淳・山内義雄・神西清・新庄嘉章訳

世界文学全集　24

背徳者／狭き門／田園交響楽／女の学校／ロベール

アンドレ・ジイド

訳者　石川淳／山内義雄／神西清／新庄嘉章

発行／1971年6月30日　　7刷／1977年8月15日
発行者／佐藤亮一　東京都新宿区矢来町71
発行所／株式会社・新潮社　東京都新宿区矢来町71
電話東京(03)266-5111　振替東京4-808　郵便番号162
印刷所／株式会社光邦　製本所／新宿加藤製本所
本文用紙／三菱製紙株式会社
製函／文京紙器株式会社
函貼・扉・見返／特種製紙株式会社
表紙クロス／ダイニック株式会社

乱丁・落丁本はお取替えいたします　Printed in Japan 1971

目次

背徳者 …… 3
狭き門 …… 131
田園交響楽 …… 281
女の学校 …… 347
ロベール …… 425
アンドレ・ジイド …… 465

L'Immoraliste

La Porte étroite

La Symphonie pastorale

L'Ecole des Femmes

Robert

by

André Gide

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

背徳者

——アンリ・ゲオンに献ず——

われなんじに感謝す、われは畏(おそ)るべく
奇(くす)しくつくられたり

詩編第一三九編一四節

序

わたしは、その値かくのごときなればこそ、この書を与える。これは苦い灰にまみれた果実である。たとえば砂漠のコロシントのごときか。焦土に生じて渇ける舌をいや激しく焼き爛らすものながら、黄金なす砂の上にあっては麗わしくないとはいえぬ。

仮にわたしの主人公を一つの鑑として示したならば、わたしはきっと失敗したに違いない。ミシェルの物語に心をひかれた少数の人々も、仁慈の情にかられて彼を責めるのに急であった。わたしがあまたの徳をもってマルスリイヌの身を飾ったのは、無益ではなかった。人は、ミシェルに対して、身に代えて彼女を守らないことを許さなかったのである。

また、もしわたしがこの書をもってミシェルに対する訴状としたならば、同じく成功を贏ち得なかったことであろう。なぜなら何人も、わたしの主人公に対して憤激を感じながら、それについてわたしに謝するところがなかったからである。人はこの憤激をわたしの意志に反して感じたかのごとくである。この憤の情はミシェルよりひいてわたし自身の上に及んだ。ややもすれば、人はわたしと彼とを混同しようとしたのである。

しかし、わたしはこの書をもって訴状とも弁疏ともしようとは思わなかったのである。自ら判断を下すことを控えたのである。こんにちの読者は、作者がおのれの描き出した筋について自ら嚮背を決しないことを許さない。そればかりでなく、仕組みの中でさえも、作者が立場を定めて、アルセスト方かフィラント方か、ハムレット方かオフィリヤ方か、ファウスト方かマルグリット方か、アダム方かエホバ方かを明言することを望むかもしれぬ。わたしは中立（不決定といおうか）をもって大才の特色であるとはしない。しかし、わたしの信ずるところでは、あまたの大才の士は解決を与えることを頗るきらった傾きがある。——かつ、ある問題を巧みに提出するにはあらかじめこれを既決のものとするに当たらないのである。

心ならずも、わたしはここに《問題》という言葉を使う。ありようは、芸術には問題はないのである。

――芸術作品がそれの十分なる解決でないような問題は。

もし《問題》をもって《仕組み》と解するならば、この書の物語るところのものは、わたしの主人公の心の中に演ぜられるにもせよ、その異常の身の上話の中に限られるにはあまりに一般的のものたることを失わない。わたしはこの《問題》を自分の創意に出たものとは思わぬ。それはわたしの書より前に存していたのである。ミシェルの成敗いかんにかかわらず《問題》は依然として存するのである。作者は心得として勝利をも敗北をも提示しない。

もし明識の士が、この仕組みをもって単なる奇異の物語となし、その主人公を目して一人の病者にすぎないとしたならば、すなわち、及ぼすところのひろい切実な思想がこの中に含まれていることを認めなかったならば――その咎は、この思想にもこの仕組みにもなく、実に作者に存するのである。作者が熱と涙と念とをこの書にそそぎつくしたとはいえ、なおその未熟なるによるのである。しかし、作品の真の興味とその日その日の読者のこれに寄する興味とは、両者の間にはなはだしい差異がある。思うに、あまり己惚れでもなく、興味あるものを持ちながら最初は人に喜ばれない危さを冒すことのほうを選ぶことができよう。――あすをも知れぬ、いか物好きの公衆の熱を煽るよりも。

要するに、わたしはなにものをも証明しようとしなかった。わたしの意はよく描くことと、おのれの描いたものをはっきりさせることにある。

（内閣議長D・R氏あて）

シディ・ベエ・エム

一八九…年七月三十日

ええ、お考え通りでした。ミシェルはわたしたちに話を聞かせてくれました、兄上、彼のした物語は、ここにあります。あなたはそれをお望みでした。わたしもお約束しました。しかし、それをお送りするに当たって、わたしはなおためらいます。それを読み返せば読み返すほど、恐ろしい心持ちがしてきます。ああ、あなたは、わたしたちの友だちのことをどうお考えになるだろうか。いや、一体わたし自身どう思っている

のか……うわべは扱いにくい性もよきに導き得ることを思わずに、わたしたちはひとえに彼を責めようとするのか。――ただ惧れるのは、こんにち、この物語の中におのれの姿を認めようとする者の一人にしてとどまらないことです。かばかりの知能と活力との使いみちは無いものか。――それとも、これに対して市民権を拒み得るのか。

どうしたらミシェルはものの役に立てるか。わたしにはまったくわからないということを白状します……彼には仕事が必要なのです。兄上の勲がおん身にもたらした高い位置、兄上のみ手にある権力、それをもってこの仕事を見つけることがかないましょうか。――急いで下さい。ミシェルは身をささげています。今なおそうです。しかし、彼の献身はやがて彼自身のためばかりのものとなりましょう。

わたしは朗らかな蒼天のもとにあって、兄上に書き送る。ドニとダニエルとわたしとがここに来てから十二日以来、雲一つ、日のかげり一つありません。空は二月このかた澄んでいると、ミシェルは言いました。

わたしはわびしくも楽しくもありません。この土地の空気は、漠然とした興奮の中に人を包み、楽しさからも苦しさからもかけ離れているような状態を感じさせます。これが幸福というものでしょうか。

わたしたちはミシェルの傍にとどまっています。彼のそばを離れたくありません。そのわけは、この記録を読めばお分かりになりましょう。ここ、彼の住居で、わたしたちはあなたのご返事を待っています。おくれないように。

ご承知のごとく、前から厚い同窓の友誼は、年と共に深くなって、ミシェルとドニとダニエルとわたしとを結びつけていました。わたしたち四人の間には一種の規約が結ばれました。かりそめにも一人が呼べば、他の三人がこれに応えなければならないことになっていたのです。で、わたしはミシェルからあの不思議な警報を受け取るやさっそくドニとダニエルにその旨を知らせて、三人とも一切を抛擲して出発しました。

わたしたちは三年ごしミシェルに会わなかったのです。彼は結婚して夫人をつれて旅に出ていたのでした。彼が最後にパリを通過した際には、ドニはギリシ

ャに、ダニエルはロシアに、わたしはご存じの通り病気の父上のもとに引きとめられていました。しかし、まったく消息の無いわけではなかったのですが、彼に会ったシラスやウィルから聞いたたよりはただ我々を驚かすばかりでした。なんとも知れない変化が彼に起こったのでした。むかしの篤学な清教徒の面影は消えうせて、あの理詰め一方のぎごちない様子もどこへやら、いつもわたしたちの放埒な話を控えさせるほど澄んだまなざしも、もう見られなくなったのです。それは……しかし、彼の物語を読めば分かることを前から言うには当たりますまい。

で、わたしはこの物語をドニとダニエルとわたしとが耳にしたままに兄上にお伝えする。ミシェルは露台の上でこの話をしました。わたしたちは彼の傍で、暗がりや、星の光の中に、寝そべっていました。物語が終わった時、平原に陽がのぼりました。ミシェルの家は、平原と、ほど近い村とを見はるかしています。この暑さに、刈りつくされた野の面は砂漠の姿を見せています。ミシェルの家は貧弱で風変わりですが、趣があります。冬は寒さに困ることでしょう。それは窓にガラスが無いからです。というよりも窓が全然無いのです。ただ壁に大きな穴があいているばかり。天気がいいので、わたしたちは外に筵を敷いて寝ます。

なお、わたしたちがいい旅行をしたことを申し上げたい。わたしたちはアルジェやコンスタンティヌをすぎて、暑さに疲れ、珍しさに酔って、日暮れにここに着きました。コンスタンティヌから、新規の汽車で、シディ・ベエ・エムまで来ました。そこには馬車が一台待っていました。道は村のはるかかなたに終わっています。村は、オンブリヤのある邑のように、岩の頂上に止まっています。わたしたちは徒歩でのぼりました。荷物は二頭の騾馬が運んで行ってくれました。この道から来れば、ミシェルの家が村のとっつきに当たります。低い塀にとざされた庭、というよりも囲いがそれを繞っているのですが、そこには、三本の曲がった柘榴の木と、みごとな夾竹桃が植わっています。そこに居合わせた一人のカビルの子は、わたしたちが近づくと、無作法に塀を乗りこえて逃げ出しました。

ミシェルは、喜びの色も現わさずにわたしたちを迎えました。非常にあっさりした様子で、彼は少しでも

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

愛情を示すことを恐れているといったふうでした。しかし、戸口のところで、まず彼は厳粛にわたしたち三人に一人一人接吻しました。

夜になるまでわたしたちは十言と言葉をかわしませんでした。質素といっていいほどの晩餐の支度が部屋の中にできていました。その部屋の華麗な装飾には、びっくりしました。が、そのことはミシェルの物語を読めばお分かりになりましょう。やがて、彼は自らこーひーをわかしてわたしたちにすすめました。それから、わたしたちははてしなくながめのひらけている露台に上がりました。そして、三人とも、ヨブの友だちのように燃ゆる野の面にたちまち落ちる日を賞でながら待ちました。

夜となって、ミシェルはこう語り出しました。

第一部

1

諸君、わたしは君たちに信のあることを知っていた。わたしの招きに君たちはかけつけてくれた。ちょうど君たちの招きにわたしがかけつけたであろうごとく。とかくして、ここに三年間、君たちはわたしに会わなかったのだ。かほどまで別離にたえる君たちの友情が、同じく、今わたしのしようとする物語にもたえ得るように。まったく、わたしが君たちをにわかに呼び寄せてこの遠国の住居にまで旅行させたというのも、ひとえに君たちに会おうがため、会って話を聞かせたいためだからだ。君たちに話をすること、それよりほかの救いをわたしは求めない。——わたしは、もはやこえることのできない生涯の一点に立っているからだ。しかし、それは倦怠ではない。が、わたしには

もう分からない。――わたしは……わたしは話をしたいのだ。おのれを自由にする術はなんでもない。むずかしいのは自由の道を知ることだ。――我が身の話をするのを許してくれ。わたしはここにわたしの生涯を君たちに物語る。飾りなく、謙遜も自負も無く、自分自身に話すであろうよりもっと飾りなく。わたしの語るところを聞いてくれ。

我々が最後に会ったのは、アンジェの付近の、わたしの結婚式が行なわれた小さな田舎の教会でのことだったと思う。会衆は少なかったが、すぐれた友だちの集まりがこの月並みな儀式を身にしみるものとしてくれた。わたしは人が感動していると思った。それがまた、わたしを感動させた。教会を出ると、わたしの妻となった女の家で、笑い声も叫び声も起こらない短い食事に、我々は君たちと落ち合った。それから、用意の馬車が習慣に従って我々を連れて行った。この習慣は我々の心の中に、結婚のことを思うにつけて、出発のプラットフォオムの幻影をいだかせる。

わたしはわたしの妻を知ることがきわめて少なかった。そして、あまり苦にもせずに、向こうでもやはりこっちを知らないのだと思っていた。わたしは恋も無く彼女を娶った。臨終に、わたしひとりを残して行くことを心にかけていた父の気を休めることが、おもだったのである。わたしは真実父を愛していた。その父の瀕死のさまに気を奪われて、わたしは、この悲しい時に際し、ただその最後をいやが上にも安らかにすることばかりを考えた。こうしてわたしは、一生がどんなものであろうかも知らずに、わたしの生涯を始めたのだ。我々の婚約は、死に行く者の枕辺で、笑い声もなく行なわれた。しかし、しんみりした喜びがないわけではなかった。それほど、このことがわたしの父に与えた平安は大きかったのだ。わたしがわたしの許婚者を愛していなかったとはいえ、少なくともわたしは他の女を愛したことがなかった。それが、わたしの目には、我々の幸福を保証するに十分だと見えた。そして、自分自身のことさえまだ分からずに、わたしは我が身をあげて彼女にささげるものと信じた。彼女もまた孤児で、二人の兄弟と一緒に暮らしていた。彼女の名はマルスリイヌといった。年はやっと二十歳だっ

た。わたしは彼女より四つ年上だった。

わたしは、彼女を愛さなかったといった。——少なくとも、わたしは、彼女に対して、いうところの恋を少しも感じなかった。しかし、それをもって慈愛、一種の憐憫、またはかなり大きな尊敬と解するならば、わたしは彼女を愛したのだ。彼女はカトリックで、わたしはプロテスタンだ……だが、わたしはほんの名ばかりだと思っていた。坊さんはわたしを受けいれ、わたしは坊さんを受けいれた。それが不釣り合いなく行なわれた。

わたしの父は、人の言葉のごとく《無神論者》だった。——少なくとも、わたしはそう想像する。父も持っていたと思われる一種の非常に強い潔癖のために、共に信仰を談ずることはまったくできなかったから。わたしの母の厳格な改革派の教えは、その美しい面影と共に、しだいにわたしの心の中に薄れて行った。君たちも知っているごとく、わたしは若くて母を失ったのだ。わたしはまだ、かの初めての童蒙訓がいかに我我を支配するか、またそれがどんな襞を心に残すかということに気がつかなかった。母に教えこまれたあの苦行の精神は、やがてわたしの趣味となって、学問の修業についてもそれがそっくり現われたのだ。母を失った時、わたしは十五歳だった。父は、ひたすらわたしの面倒を見て、わたしの教育に心をつくした。わたしはすでにラテン語とギリシャ語とを知っていた。父について、わたしは、ヘブライ語、梵語、ペルシャ語、アラビヤ語などをすみやかに習得した。二十歳ごろには、わたしは父の手伝いをさせられたほど進歩していた。父は、わたしを同輩扱いするのを楽しみにして、わたしにその証拠を見せたがった。父の名において現われた『フリジヤ人の信仰を論ず』という文は、わたしの作だった。父はほんの目を通しただけだった。しかも、これまでにないほど称賛をこおむった。父は大喜びだった。わたしはこのぺてんがうまく行ったのを見て面くらった。

しかし、それ以後わたしは世の中に出た。一流の碩学もわたしを同僚として遇してくれた。今にして人から受けたあらゆる誉れのことを思えば、ほほ笑まれる……こうして、わたしは廃址と本のほかはほとんどなにも見ずに、人生のことは少しも知らないで、二十五

歳に達した。わたしは特異の熱誠を研究に傾けた。わたしは数人の友だちを愛していた。（君たちもその中にいた。）だが、友だちよりもむしろ友情を愛したのだ。彼らに対するわたしの忠信は大きなものだった。だが、それは品のいい欲だった。わたしは我が胸の中に美しい情けを一つ一つ育んでいたのだ。要するに、わたしはわたし自身を知らなかったように、わたしの友だちを知らなかった。——自分が別の生活をなし得ようかとか、人さまざまの暮らし方があろうかというような考えは、一時たりともわたしには起こらなかったのだ。

父とわたしには、些細な物で事足りていた。二人の費やしたものはごくわずかで、わたしは、二十五歳にもなりながら、うちが金持ちであることを知らなかったくらいだ。わたしはよく考えたわけではないが、うちにはただ食うだけのものがあるのだと思っていた。わたしは、父の傍にあって倹約の癖がついていたので、うちにはもっとたくさん持物があるのだということが分かると、ほとんど当惑してしまった。わたしはかかることにはきわめて疎かった。わたしがうちの財産についていくらか明らかな観念を得たのは、わたしが唯一の相続人であったところの父の死後ではなくて、わずかにわたしの夫婦財産契約の際だった。それと同時に、わたしはマルスリイヌがほとんどなにも持って来ないということを知った。

おそらくもっと大事な、わたしの知らなかったものが他に一つある。それはわたしの健康が極めて弱かったということだ。試練を受けたことがなくて、どうしてそれが分かろう。わたしは時々風邪を引いたが、いい加減にしてほっておいた。あまりにおだやかなわたしの生活が、わたしを弱らせると同時に、わたしを保っていた。マルスリイヌは反対に丈夫らしかった。——わたしよりもそうらしかった。それは、我々がやがては知らなければならなかったことだ。

結婚式の夜、我々はパリのわたしのアパアトメントで寝た。そこには部屋が二つ取ってあったのだ。我々は必要な買物に費やした時間しかパリにとどまらなかった。それからマルセイユへ行き、そこからすぐにテニュスへ向けて船に乗った。

さし迫った心づかい、あまりに急激な身辺雑事の目眩き、一際身に応える喪の悲しみの後にすぐ来た結婚のまぬかれがたい感動、それらはみなわたしの力を涸らしてしまったのだ。船に乗ってようやっと、わたしは疲労を感ずることができた。それまでは、仕事が後からあとから疲労を増すので、かえって気がまぎれていたのだ。しょうことなしの船中の無聊に、わたしは反省することができるようになった。そんなことは初めてのように思われた。

同じく初めて、わたしはしばらく研究から遠ざかることを肯んじた。わたしは従来我が身に短い休暇しか与えなかったのだ。母の死後間もなく父と共に行ったスペインの旅は、実際、一ヵ月以上続いた。もう一つ、ドイツ旅行が六週間。その他なお数回の旅。――だが、それは研究旅行だった。その間、父は非常に精密な研究から気をそらさなかった。わたしは、父に従って行かない時には、本を読んでいた。しかし、マルセイユを離れると、グラナダやセヴィラのさまざまの思い出、もっと澄んだ空、もっとはっきりした影、祭り、歌の思い出が心によみがえった。それだ、これから再び見に行こうとするものは、とわたしは思った。わたしは甲板に上がって、遠ざかり行くマルセイユをながめた。

それから、急に、わたしは少しマルスリイヌをうっちゃり放しにしていたと思った。

彼女は前方に腰かけていた。わたしは近づいた。そして、まったく初めて、彼女をながめた。

マルスリイヌは非常に綺麗だった。君たちは知っていよう、会ったことがあるから。わたしは、まずそれに気がつかなかったことを心に責めた。わたしは、こと新しくながめるには、彼女を知りすぎていたのだ。お互いの家庭にはいつも繋りがあった。わたしは彼女の大きくなるのを見た。彼女の美しさにはなれていた……初めて、わたしは驚いた。それほど、この美しさが大きく見えたのだ。

飾りの無い黒い麦藁帽の上に、彼女は大幅のヴェールをなびかせていた。彼女は金髪だったが、華奢には見えなかった。対の袴と胴着は、二人が一緒に選んだスコッチ地でできていた。わたしは彼女がわたしの喪のために陰気になることを欲しなかったのだ。

彼女は、わたしのながめているのを感じて、こっちをふり向いた……これまで彼女の傍にあっては、わたしはうわべの熱意を見せていただけだった。わたしは、どうかこうか、一種の冷たい礼譲をもって愛に代えていた。それが彼女を悩ましていたことは、よく分かっていた。マルスリイヌは、この時初めてわたしが別の目で彼女をながめていることを感じたのか、今度は向こうからわたしをじっと見た。それから、それはやさしくにっこりと笑った。口をきかずに、わたしは彼女の傍に腰かけた。わたしは、従来、自分のために、少なくとも自分の考え通りに生きて来たのだ。わたしは、自分の妻が一人の友だちということよりほか思わずに、二人の結合によって自分の生活が一変されるかも知れぬということをはっきり考えもせずに、結婚したのだ。ここにいたって、わたしはこれで独白はおしまいだということが分かった。

甲板には、我々二人きりだった。彼女はわたしの方へ額をさし出した。わたしはやさしく彼女を胸に抱きしめた。彼女は目を上げた。わたしはその瞼の上に接吻した。すると、急に、自分の接吻のおかげで、一種の新たなる憐憫を感じた。心が彼女でいっぱいになって、あまりの激しさに、わたしは涙を押えることができなかった。

「どうなさいまして」とマルスリイヌがわたしにいった。

我々は話を始めた。彼女の話の巧さにわたしはうっとりとした。わたしはわたしだけで、女の愚かなことについて多少の考えを持っていたのだ。この夕、彼女の傍にあっては、自分がぎごちなくのろまに思われた。

かく、我が生をかけた女はそれ自らの実の生を持っていたのである。この考えが胸に迫って、この夜わたしはなん度も目をさました。なん度も、わたしは寝床の上に起きなおって、下の寝床に眠っている我が妻マルスリイヌを見たことだった。

明くる日、空は晴れわたり海はほとんど凪いでいた。ゆったりした会話に、お互いの窮屈がいっそう減じて行った。結婚は実際に始まったのだ。十月の終わりの日の朝、我々はチュニスに上陸した。

わたしはわずかの間しか、そこにとどまらないつも

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton